



沖縄県名護市屋我地島にて

特集／比嘉照夫教授のルーツを訪ねて

～自然の中で育まれる豊かな感性～

EM開発者・農学博士
比嘉照夫 教授

比嘉照夫教授がこれまで語ってきた「有害なエネルギーを蘇生的な有用なエネルギーに転換する機能」（本誌17号）や、「EMの波動作用」（本誌18号）の内容は、にわかには信じられないという人も多かったのではないだろうか。

私たちは教育によつて、知らず知らずのうちに「教科書に書いてあることが正しい」とか、「科学的に証明されたことが真実」などと思いつまされてきた部分もある。

しかし、比嘉教授にはそれとは反対の、すなわち、「今、目の前で起こっていること（結果）こそ、真実だ」というシンプルな考え方があり、そこには揺らぐことのない確信がある。しかもその「目の前で起こっていること」への観察力は鋭い。同じ現象を見たとしても人は見逃してしまうような細かな変化や違いを素早く見つけることができる。

いったいこの観察眼はどこからくるのだろうか。

その答えを求めて、比嘉教授とともに子ども時代を振り返る旅に出た。



照夫少年は、沖縄本島の北西部に位置する本部半島で生まれた。父親は29歳の若さで小学校の校長になり、教育に一生を捧げた人だった。当時は、小学校の敷地内に校長住宅というのがあり、転勤するたびに、次に勤務する小学校の校長住宅へ引っ越すというのが比嘉家のスタイルだった。照夫少年が生まれたのは、戦時中の1941年。父親が兼次小学校の校長を務めていた時だった。物心ついた頃には、小学校には日本の陸軍が駐留しており、校庭で兵隊たちが爆弾を抱えて戦車に飛び込む訓練を見て、あの兵隊は上手だの下手だのと特攻評論家になって遊んでいた。

1945年の最終決戦の時、小学校は海が近いので、艦砲の攻撃で大きな被害を受けた。比嘉一家は、父親が中学生の生徒たちに指導して掘らせた防空壕のある、北山城跡（今帰仁城跡）の裏山に逃げた。当時まだ3歳だった照夫少年は逃げる途中、水たまりでカエルを見つけて捕まえようとしたので、気丈な姉に大いに怒られた。

終戦によって約半年間は、捕虜として収容所での暮らしを経験したのち、今帰仁小学校の校長住宅に移った。照夫少年はこの今帰仁で幼児期から中学時代までを過ごした。

暮らしを経験したのち、今帰仁小学校の校長住宅に移った。照夫少年はこの今帰仁で幼児期から中学時代までを過ごした。

校長住宅の周辺は、雑木林や大家族の比嘉家の食糧を自給するための農園があり、他の民家はかなり離れたところにしかなかった。かやぶきの家で、まだガスは無かったので、生活に必要な薪木を集めるため、照夫少年も松に登って枯れ枝を切ったり、近くの山（乙羽岳）に取りに行った。小学校の前には、枝が高い位置にある、すらっとした松が一本あり、今も残っている。この松から落ちて怪我をする人もいた中で、照夫少年はひもを使った特別な木のぼり術を考案し、「あんなに高い枝に登って枯れ枝をとれるのは照夫以外にはいない」と言われるほど、学校一番の木のぼり上手になった。運動が得意だったのかと聞いてみると、「すぐ上の兄が勉強も運動も優秀だったので、自分とすぐ下の弟はいつも比べられていた」という答えが返ってきた。運動能力というより、頭を使って工夫するのが得意だったようだ。

とにかく好奇心旺盛で、勇気があり、わんぱくだった。学校の近くの雑木林には、神様を祭る拝所があり、人がむやみに入ってはいけない場所だった。その拝所の青い木を切ると祟られるという噂があつて、猛毒をもつハブもいるので、怖がって入る人はいなかった。

ある日、薪木にするための枯れ枝を採りに入ってもいいかと、近所の大人に聞いてみたら、枯れ木ならいいだろうという返事をもらい、臆することなく林に入ったことがある。雑木林からどつさりと薪木を抱えて出てきた照夫少年の姿を見た村の別の大人が、まるで幽霊を見たかのように驚いて、大騒ぎになった。同級生達からも「お前、祟られるぞ」と言われたが、「ちゃんと許可をもらって入ったんだ」と、悪いことはしていないという自信をもっていた。（実際、祟られなかった）

屋敷の周りには岩や石が多く、ハブがいっぱいいて、危険が常に身近にあった。そんな大自然の環境が、自然への適応能力を磨いてくれた。

続きを読む>>